＜分担研究報告＞

小児期の成長・発達と養育条件に関する医学的，心理学的及び社会学的研究

分担研究者　高　野　　陽

我が国の母子保健の水準は，統計資料などで見るかぎりかなり高度なものであり，その結果として母子保健に対する関心の薄れが気に掛かる。今後は，ここまで達したレベルの低下は極力避けねばならぬことはいうまでもない。そのためにも，養育条件の向上がより一層必要なものとなろう。今日のように，育児が多様化したなかでは，養育機能の混乱を防ぎ，小児期の健康障害への影響を少なくする手立てを広く社会に求めていくことが必要であると思われる。その意味からも，２年目を迎えた本研究は，多領域から学際的なチーム編成によって，多角的に実施されていることに大きな意義がある。

今年度も昨年と同様８つの視点，すなわち，

(1)　乳幼児の食生活に影響する養育条件，
(2)　乳幼児の健康及び発達に影響する環境条件，
(3)　父母の養育態度の形成に影響する条件，
(4)　劣悪な親子関係の社会病理的条件，
(5)　自閉症発生予防と養育条件，
(6)　小児期の精神保健に影響する養育条件，
(7)　思春期小児の健康に影響する養育条件，
(8)　小児の成長に影響する地域条件，

で研究を進め，併せて，乳幼児の発育に関する研究「乳幼児身体発育調査の検討に関する研究」を加え，さらに充実した研究を目指した。それは，養育機能の低下，出生数の減少などの現状の下で，保健指導に有効な身体発育値の作成のための効果的な発育調査のあり方を検討するもので，高石国立公衆衛生院次長が担当される。

本年度は２年目で研究の途上ではあるが，着々とその成果があがっており，研究に協力されている諸先生方に心から感謝の念を表したい。また，明年度には，行政で役に立つ指針が提示されるものと期待している。

今年度の研究成果の概要は，以下に示す通りである。（　）内は，研究協力者を示す。

(1)　乳幼児の食行動に影響を及ぼす養育条件に関する研究（八倉巻和子）

乳幼児の健康に大きな影響を与える食行動の発達には，多くの因子が関与する。そのうちの一つ養育条件との関係を明確にし，今後の栄養指導に役立てるもので，全国５地域の保育所・幼稚園児とその母親に調査を行い，地域条件が養育条件に影響を与え，それが幼児の食事に反映されていることを報告している。特に，農村地帯と都市部との間には，顕著な差異が認められ，食事に関して困った問題の発生において，養育条件との関係は明らかになっている。

(2)　乳幼児の健康及び発達に影響を及ぼす社会環境的条件に関する研究（高城義太郎）

乳幼児の健康・発達と環境条件との関連分析を行い，乳幼児の健康増進や順調な発達に資することを目的として研究が進められ，本年度は微症状と環境条件との関係を分析している。乳幼児の微症状の発生は，住宅の構造・住宅にいる昆虫など住宅の条件と密接な関連を有し，また，母親の社会活動・近隣との付き合い方などとも関係が見られる。すなわち，乳幼児の健康は，単に個人的な因子だけでなく，社会的環境要因がこれまで知られていた以上に大きく関与していることを指摘している。

(3)　父母の養育態度の形成と評価に関する研究（高橋種昭）

近年，母親のみならず父親の育児に関する研究が注目されているが，我が国では，父親の養

育に関する研究は少ない。昨年に引き続き，本研究では，父親の育児に関する研究を行っているが，研究の視点を特に今回は，母親の育児不安との関係でみている。

沖縄県の離島で調査を行い，1歳6か月児健康診査・3歳児健康診査のときにきた母親に調査紙を配布したが，育児不安は年齢によって異なり，その相談には夫は一緒には考えてくれないことが多いなど，夫婦の間に育児をめぐり興味ある結果が示されている。

(4) 親子関係の失調に関する社会病理的研究（松井一郎）

被虐待児症候群・愛情剥奪症候群などの実態については，現在でも明確に把握されていない現状にある。それを医療の場で把握し，その発生に関する要因を明らかにし，発生・再発防止のための援助のあり方を検討することを目的に研究が進んでいる。

全国500か所の医療機関小児科で把握された被虐待児と愛情剥奪児などを分析し，特に，再発の危険性をもつものには，養育者の精神疾患・養育者の生育歴に問題があるものなど，養育者側に多くの要因が指摘されている。

(5) 自閉症の発生予防における臨界期に関する研究（瀬川昌也）

自閉症の発生原因に関して，大脳生理学的，生化学的，神経病理学的に研究が続けられ，新しい内容が次々に報告されている。例えば，猫を用いた実験で傷害されている部位の確定・治療における薬剤の効果・自閉症児の頭蓋内のCTスキャンによる検索・セロトニンの大脳における役割と自閉症における関係などを追及している。

(6) かかわりの発達とその歪みに関する研究（岡　宏子）

登校拒否・いじめなどの小児に問題のあるもののなかに，「人とのかかわり」が持てないものが多いという指摘があり，「人とのかかわり」の発達に関する研究が必要になった。この研究では，小児を広く乳幼児・学童生徒・思春期ととらえ，保育所・幼稚園・学校・教護院における小児を対象に進められ，幼児期で既に「かかわり」に問題が指摘されたものや，学校の保健室に来るものには家庭に問題があって「人とのかかわり方」が拙劣なものもおり，さらに教護院にいる児童には親・家族との関係に問題が多いことを指摘している。

(7) 思春期小児の健康に対する家庭保健のあり方に関する研究（村田光範）

思春期における健康の問題は，小児保健のなかでも今日では非常に重要な位置を占めるようになった。この問題を家庭という場で的確に対処できるようにするためにも，思春期に関する理解を深める必要がある。

本研究は，思春期の心身の健康に関する問題を発育・生活・栄養・精神保健・性などと多角的に取り上げている。このなかで，発育様相に関する見解・栄養摂取と成人病との関係・思春期児童の行動に見られる問題・若年者の妊娠における家庭の問題，なども指摘されている。

(8) 小児の成長の地域差に関する研究（東郷正美）

我が国だけでなく，世界の多くの地域において小児の身体発育には地域差が認められているが，その原因についての明解な答えはまだ無い。養育上の問題も一つの因子となろう。

出生時の体位と幼児期・学童期の体位の比較を行い，年長になるにつれて地域差が明確に現われていること，群馬県内の一農村においても地域差の発生があるなど，今後の究明を待ちたい。

(9) 乳幼児身体発育調査の検討に関する研究（高石昌弘）

昭和25年以来10年おきに実施されている乳幼児身体発育調査を，昭和65年においても円滑に実施できるように，調査の企画立案にかかわる準備段階として，過去の調査における問題点を検討した。発育調査は，我が国の乳幼児の発育評価における「基準値」となるものを作成する際の基礎資料を得るためであることからも，その実施の意義は大きい。今回の研究で指摘された問題点として，2歳児の身長・頭囲の計測の問題，発育曲線の利用に関する問題などであり，その他，乳歯に関する調査，精神発達に関する調査の必要性も検討された。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

我が国の母子保健の水準は,統計資料などで見るかぎりかなり高度なものであり,その結果として母子保健に対する関心の薄れが気に掛かる。今後は,ここまで達したレベルの低下は極力避けねばならぬことはいうまでもない。そのためにも,養育条件の向上がより一層必要なものとなろう。今日のように,育児が多様化したなかでは,養育機能の混乱を防ぎ,小児期の健康障害への影響を少なくする手立てを広く社会に求めていくことが必要であると思われる。その意味からも,2年目を迎えた本研究は,多領域から学際的なチーム編成によって,多角的に実施されていることに大きな意義がある。

今年度も昨年と同様8つの視点,すなわち,

(1)乳幼児の食生活に影響する養育条件,

(2)乳幼児の健康及び発達に影響する環境条件,

(3)父母の養育態度の形成に影響する条件,

(4)劣悪な親子関係の社会病理的条件,

(5)自閉症発生予防と養育条件,

(6)小児期の精神保健に影響する養育条件,

(7)思春期小児の健康に影響する養育条件,

(8)小児の成長に影響する地域条件,

で研究を進め,併せて,乳幼児の発育に関する研究「乳幼児身体発育調査の検討に関する研究」を加え,さらに充実した研究を目指した。それは,養育機能の低下,出生数の減少などの現状の下で,保健指導に有効な身体発育値の作成のための効果的な発育調査のあり方を検討するもので,高石国立公衆衛生院次長が担当される。本年度は2年目で研究の途上ではあるが,着々とその成果があがっており,研究に協力されている諸先生方に心から感謝の念を表したい。また,明年度には,行政で役に立つ指針が提示されるものと期待している。今年度の研究成果の概要は,以下に示す通りである。()内は,研究協力者を示す。